

よりどりインドネシア第77号 (2020年9月7日発行)



廉価品の家電を売る店の店員さん
(2002年8月17日、東カリマンタン州サマリンダ市)

- オイルパーム農園開発と闘う慣習法社会
～中カリマンタン州キニパンの土地紛争～ (松井和久) 2
- ラサ・サヤン (9)
～もし〇〇ならば、あなたはインドネシア人かも～ (石川礼子) 11
- 往復書簡ーインドネシア映画縦横無尽
第4信: 地方舞台の映画の意義 (横山裕一) 23
- モフタル事件再考
～900人余のロームシャはなぜ死んだのか～ (松井和久) 28

オイルパーム農園開発と闘う慣習法社会 ～中カリマンタン州キニパンの土地紛争～

経済開発に付随して起こる、開発する側と開発される側との間で生じる土地紛争は、インドネシアでは、1960年代から続く大きな問題です。

大統領府土地問題解決促進チームによると、2016～2019年に全国から666件の紛争報告があり、これは17万6,132世帯の145万7,084ヘクタールが係争地となっています。そして、コロナ禍の2020年3～7月だけで28件の紛争報告が上がっています。

今回取り上げる中カリマンタン州でも、2005～2018年に住民とオイルパーム農園企業との紛争が少なくとも345件起こっています。とくに近年、土地紛争とともに、住民側が犯罪者扱いされる犯罪化のケースが目立ってきています。

今、インドネシアの各地で、長年にわたって地域に根づいてきた慣習法(adat)に基づく資源管理を行ってきた住民が先祖伝来のコミュニティの土地や資源をどう守るかという点と、政府が伝統社会の住民のエンパワーメントを図って生活を豊かにさせたいという点とがうまく調和できずに、外来の民間大資本による開発が優先されてしまう現実があります。

今回はその一例として、中カリマンタン州ラマンダウ県バタンカワ郡キニパン村を中心とする、ラマン・キニパン慣習法社会(Komunitas Adat Laman Kinipan: 以下「キニパン慣習法社会」とする)とオイルパーム農園開発会社 PT. Sawit Mandiri Lestari (以下「SML社」とする)との紛争の話を取り上げます。

直近の出来事のハイライトは、2020年8月26日、キニパン慣習法社会のエフエンディ・ブヒン(Effendi Buhing)代表が警察に逮捕された事件でした。ブヒン代表は、SML社のオイルパーム農園開発がキニパン慣習法社会の管理する慣習法林(hutan adat)に入ってくることを阻止する住民運動の中心メンバーで、長年、運動の先頭に立ってきました。

慣習法林を守る運動を続けてきたブヒン代表逮捕の情報は、SNS等を通じて広く拡散されました。そして、全国各地の慣習法社会の連合体である全国慣習法社

会連合（AMAN: Aliansi Masyarakat Adat Nusantara）などが中心となり、地元の中カリマンタン州はもちろん、全国各地で逮捕への抗議デモが起こり、国際的にも注目される事態となりました。



中カリマンタン州の州都パラカラヤでのブヒン代表逮捕への抗議デモ
(出所) <https://indonews.id/artikel/312338/AMAN-Adukan-Polisi-Penangkap-Ketua-Adat-Kinipan-ke-Kompolnas-dan-Divpropam/>

ブヒン代表の逮捕理由は、SML 社所有のチェーンソーの窃盗を首謀という容疑で、警察は「慣習林や土地紛争とは関係ない」としていますが、そのように額面通りには受け取れない背景がありました。

以下では、ブヒン代表逮捕事件の流れをみた後、キニパン慣習法社会側と SML 者側の大きく食い違う言い分を照らし合わせ、慣習法社会とオイルパーム農園開発の紛争の背後でうごめく政治利権の世界へ迫ってみたいと思います。

●ブヒン代表逮捕事件をめぐって

2020年8月26日、警察がブヒン代表の家に来て、ブヒン代表を逮捕し、警察署へ連行する事件が起こりました。容疑は窃盗や脅迫でした。

ブヒン代表が逮捕される11日前の8月15日、キニパン慣習法社会のメンバーであるリスワン氏が逮捕されていました。警察がリスワン氏の家に来て、まず村長宅へ行き、村長立会いの下、警察はリスワン氏に対して「6月23日にSML社近くの林でキニパン慣習法社会のメンバーは何をしていたのか」と問いただしました。その後、警察はリスワン氏と村長の2人を派出所へ連れていこう

としましたが、召喚状がないとの理由で村長が拒否し、警察はいったん引き取り
ます。

翌日の8月16日、再び警察がやって来て、リスワン氏と村長をラマンダウ県警
察署へ連行し、弁護士抜きで2人を取り調べます。そして、さらに2人は中カリ
マンタン州警察本部へ連行され、取り調べが続けられました。最終的にリスワン
氏は窃盗と脅迫の容疑で逮捕・拘束され、村長はリスワン氏の家族へ伝えるため
に釈放されました。

警察によると、リスワン氏は SML 社所有のチェーンソーを盗んだだけでなく、
SML 社の監視小屋に放火した疑いがかけられました。そして、それらの行為の
首謀者がブヒン代表だとされ、8月26日にブヒン代表が逮捕される事態となっ
たのです。



ブヒン代表が逮捕され、連行される様子

(出所) <https://kbr.id/nasional/09->

[2020/penangkapan_ketua_adat_laman_kinipan_aman_akan_lapor_propam/103503.html](https://kbr.id/nasional/09-2020/penangkapan_ketua_adat_laman_kinipan_aman_akan_lapor_propam/103503.html)

警察は、逮捕は手続に則った正当なものであり、窃盗や脅迫という純粋な犯罪の
容疑であって、土地紛争とは関係がないことを再三説明しました。しかし、キニ
パン慣習法社会関係者の逮捕は不当であるとの抗議が全国で警察の予想以上の
広がりを見せ、各地で抗議デモが頻発するようになりました。警察も状況を鎮静
化させる必要を認識し、8月末にブヒン代表やリスワン氏を釈放しました。

釈放されたブヒン代表は、「警察の対応は紳士的で問題なかったもので、皆さんの
抗議の声を鎮めてほしい」という内容のビデオを出し、それがネット上で拡散さ

れました。しかし、それは嘘でした。その後、ブヒン代表は9月2日、インドネシアで最も人気のあるトーク番組『ナジワの眼』(Mata Najwa) に出演し、ビデオの内容は警察の筋書きに沿った屈辱的なものだったが、釈放されるための条件だった、実際はテロリストであるかのように扱われた、と暴露しました。そして9月4日、国家人権委員会に対して、警察による不当逮捕と訴えました。

ブヒン代表は、今後も、慣習法林を SML 社によるオイルパーム農園開発から守るため、闘いを続けていく意向ですが、次に、SML 者側の主張を見ておきたいと思います。

●SML 社側の言い分

SML 社によると、ブヒン代表らキニパン慣習法社会のメンバーらによって、様々な妨害行為を受けてきており、警察にも報告してきました。

キニパン慣習法社会との紛争が直接起こったのは、2018年10月8日、ブヒン代表らキニパン慣習法社会のメンバーらが県議会前で、慣習法林をオイルパーム農園開発する SML 社への抗議デモを行っているとき、ブヒン代表から 50 億ルピアを要求されたとのこと。SML 社は、農園開発区域に慣習法林は含まれていないとし、要求には応じませんでした。

抗議デモが続くなか、2019年12月3日、SML 社所有のチェーンソーと従業員の車が窃盗の被害に遭い、窃盗の実行者から金を要求されたのですが、この事件の裏にブヒン代表がいることが分かったということです。SML 社は警察に通報しましたが、警察は動きませんでした。

2020年2月初め、SML 社の作業現場に障害物が建てられ、警察に通報しました。それもブヒン代表の仕業だと分かったと言います。その頃、ブヒン代表はビデオを通じて SML 社を批判していました。

2020年3月10日、掘削作業をしていた SML 社の3人の作業員が10人ほどの一団から凶器で脅されましたが、彼らがブヒン代表の仲間であることが分かったということです。

2020年6月24日、20人ぐらいの集団がやってきてSML社所有のチェーンソーを盗みましたが、これもブヒン代表らの仕業であるとして、州警察へ通報しました。そして7月末、SML社の見張り小屋が何者かに焼かれ、8月4日に警察による現場検証が行われました。

これらのSML社の言い分は、今回の警察によるブヒン代表らの逮捕の容疑とほぼ一致する内容になっています。SML社にとって、ブヒン代表がいかに目障りで邪魔な存在であったかが分かるような言い分です。

●SML社のオイルパーム農園開発史

SML社は、実は2010年頃からオイルパーム農園開発許可を得るため、中カリマンタン州で動いていました。SML社によれば、その過程で、すでにキニパンを含む地元住民と話し合いを何度も持ち、住民側も納得していたといいます。



SML社によるオイルパーム農園開発風景

(出所) <https://www.boombastis.com/nasib-hutan-adat-kinipan-kalteng/275965>

2012年には立地許可、及びオイルパーム農園事業許可を取得し、12村にまたがる2万6,995ヘクタール(核となる自社農園が1万2,561ヘクタール、住民所有の小農園(plasma)が1万4,434ヘクタール)を開発することになりました。インドネシアにおいては、通常、こうした大規模農園開発では、自社の直営農園のほかに、周辺住民に栽培してもらい、その成果物を買収するという核農園システム(Nuclear Estate System)という仕組みを取り入れています。

その後、2015年3月19日付で林業環境省から1万9,091ヘクタール(自社農園9,435ヘクタール、住民小農園9,656ヘクタール)が認可された後、2017年4月13日付で、国家土地庁による測量確認を経て、最終的には1万7,046ヘクタール(自社農園9,435ヘクタール、住民小農園7,611ヘクタール)が開発面積として確定しました。対象は9村となりました。

SML社としては、法的に何も問題がないとして、計画通りにオイルパーム農園開発を進めてきています。ただ、SML社からすれば、2016年のある新しい動きがなければキニパン慣習法社会との紛争もなく、すべて順調に進むはずでした。

●慣習法領域の登録

その動きとは、全国慣習法社会連合(AMAN)が中心になって推進した慣習法領域登録委員会(Badan Registrasi Wilayah Adat: BRWA)にキニパン慣習法社会が加入し、慣習法領域登録のためのマッピング、領域の設定を行なったことでした。この結果、SML社の許可区域とキニパン慣習法社会による慣習法領域とが二重に重なる区域が出てきてしまったのです。

キニパン慣習法社会によると、慣習法領域として1万6,164ヘクタールが登録されたのですが、そのうちの約4,000ヘクタールでSML社がオイルパーム農園開発を進めうるということが分かったのです。

インドネシア共和国憲法の第18B条では、「国家は慣習法社会を認め、尊重する」と謳い、現在に至るまで存続している慣習法社会を無視してはならないのです。また、ダヤック慣習法組織に関する中カリマンタン州令2008年第16号でも、慣習法に基づく土地の権利が認められています。実際、慣習法社会は、インドネシア共和国が独立する以前から存在していたものでもあります。

●キニパン慣習法社会から見た変遷

先ほどは、SML社から見たオイルパーム農園開発史でしたが、今度は、キニパン慣習法社会から見たこれまでの変遷について触れておきます。

キニパン村は2005年当時、デラン郡に属しており、そのときすでにオイルパーム投資を拒否することで全村一致していました。その数年後、デラン郡からバタ

ンカワ郡が分立したのを契機に、全村一致の決意が崩れ、オイルパーム投資計画が入り込むようになっていきました。キニパン村はそのバタンカワ郡に属しました。

2012年にSML社がオイルパーム農園開発計画の住民への説明を行いました。キニパン村の住民は拒否しました。2016年にも拒否し、慣習法領域登録を行うことによって、拒否の姿勢を強めることとなりました。

2018年には、代表8名がジャカルタへ向かい、大統領府に訴えたことで、2019年1月末、大統領府土地問題解決促進チームが現地調査に訪れました。キニパン慣習法社会は、SML社によるオイルパーム農園開発をストップできるのではないかの期待を膨らませましたが、現実には難しいものでした。



オイルパーム農園開発に反対するキニパンの人々

(出所) <https://www.boombastis.com/nasib-hutan-adat-kinipan-kalteng/275965>

なぜなら、中カリマンタン州政府が冷淡な態度に終始しているからです。州官房長は「キニパンには慣習法林は存在しない」と発言しました。キニパン慣習法社会は、2016年からずっと慣習法林を認めるように訴えてきましたが、肝心の地方政府がそれを認めようとしていないのです。

逆に、地方政府は、キニパン慣習法社会が慣習法領域登録を行ったことで、話を混乱させているという認識なのです。すなわち、地方政府はSML社のオイルパーム農園開発を進めたいと考えており、キニパン慣習法社会のブヒン代表を逮捕した警察の側に立っています。その理由は、SML社をめぐる利権構造と関わ

ってくるようなのです。

●SML社をめぐる利権構造

SML社を所有しているのは誰なのでしょう。実は、その情報は不明です。2015年末まで、SML社は、中カリマンタンを中心にオイルパーム農園事業を展開するPT. Sawit Sumbermas Saranaという企業の子会社でした。このPT. Sawit Sumbermas Saranaはジャカルタ証券取引所の上場企業ですが、株式の53.75%をPT. Citra Borneo Indahという企業が所有しています。

前述のPT. Citra Borneo Indahを持つのは、アブドゥル・ラシッド (Abdul Rasyid) という中カリマンタン出身の実業家です。彼はインドネシア版『フォーブス』の国内富豪番付で50位に入っており、シンガポールに住んでいます。オイルパーム事業で財を成し、富豪の仲間入りを果たしたのですが、地方メディアを複数持つなど、中カリマンタン州の政治に絶大なる影響力を持っています。

まず、現在の中カリマンタン州のスギアント (Sugianto Sabran) 州知事は、彼の息子です。2016年から州知事を務め、闘争民主党 (PDIP) に所属しています。次に、もう一人の息子のアグスティアル (Agustiar Sabran) 氏は州知事の弟で、やはり闘争民主党 (PDIP) 所属の国会議員かつダヤック慣習法会議 (Dewan Adat Dayak: DAD) 中カリマンタン州支部長です。

さらに、ゴルカル党州支部長を2017年から務めるルスラン (Ruslan Abdul Rasyid) 氏は彼の実兄で、その妻のヌルヒダヤ (Nurhidayah) 氏もゴルカル党所属の政治家で、2017年から西コタワリンギン県の県知事を務めています。彼の伯父はかつてラマンダウ県の県知事を務めていました (個人名は未確認)。

SML社は2015年12月31日付で、PT. Metro Jaya Lestariという企業へ売却されました。その理由としては、土地収用が住民の反対でうまく進まないことが挙げられています。キニパン村の強い拒否の姿勢を思い起こさせます。

なお、現時点まで、このPT. Metro Jaya Lestariについての情報をつかむことができていません。このため、SML社が今もアブドゥル・ラシッド一族の意向を受けているのかどうかについては確認できませんが、キニパン慣習法社会への対応を見る限りでは、アブドゥル・ラシッド氏本人がどうかは別として、一族

としてまだ何らかの利権関係があるような匂いがします。

こうした地方における一族支配は、インドネシアのどの地方にも程度の差こそあれ見られるものですが、とくにカリマンタンは、石油ガス、石炭、オイルパーム、木材と様々な資源の宝庫であり、一族支配による利権独占の傾向はより強いように思えます。

中カリマンタン州の面積は 1,580 万ヘクタールで、そのなんと 78%に当たる 1,130 万ヘクタールはすでに開発許可が与えられていると言われます。森林面積も 1990 年の 1,105 万ヘクタールから 2014 年には 780 万ヘクタールへ激減しています。その結果、大規模な森林開発の後、今やどこにでも、かつてはなかった洪水や森林火災が起こるようになってしまいました。

他方で、2018 年 12 月、インドネシア世界平和委員会は、中カリマンタン州を「世界の肺の首都」(ibukota paru-paru dunia) と名付けました。これは、痛烈な皮肉以外の何物でもありません。

(松井和久)

ラサ・サヤン (9) ～もし〇〇ならば、あなたはインドネシア人かも～

何年か前に、「もし〇〇ならば、あなたはインドネシア人かも」とか、「インドネシア人になるためには〇〇をしよう」という、インドネシア人の特徴を面白おかしくリストアップした笑い話がネットで出回ったことがあります。

ネット検索してみましたが、当時出回っていたオリジナルのインドネシア語版は見つかりませんでした。でも、同じ時期に外国人駐在員用に書かれたと思われる英語版のものは見つかりました。最近では YouTube で、アメリカ人青年がインドネシア人を話題にしたり、インドネシア在住のカナダ人女性がインドネシア人の特徴を話題にしたチャンネルを作ったりしているので、そちらも参考にし「インドネシア人の特徴」を検証してみました。

それらの特徴は、「うん、そうそう！」などと頷けるものも多く、インドネシア人である主人や娘たち、そして友達と共有するのは楽しいのですが、下手するとインドネシア人全体を卑下しているように思われそうな内容もあり、共有するには注意が必要です。実際、主人に見せたときに、主人が「ふざけ過ぎている！」と気分を害したことがありますので。

下記は、上述の駐在員用の英語版を和訳したのですが、111 項目もあり、なかには時代遅れのものや、否定的に捉えられるものも多々ありました。そこで、現在でも通用すると思われるもの、ネガティブになり過ぎないものを抜粋して訳してみました。

●その1 : Living in Indonesia / A site for Expatriates

(<https://www.expat.or.id/info/anindonesian.html>)

下記が当てはまれば、あなたはインドネシア人かも・・・

1. 一日米飯を食べないと、お腹の調子が悪くなる。
2. ABC ケチャップは不味い料理をグルメ料理に変えることができると思っている。
3. 10 個以上の略語を知っている。
4. 映画鑑賞している間、お喋りする。



5. 朝食にナシゴレン (インドネシア炒め飯) を食べる。
6. 450 ml のチリソースを旅行に持って行く。
7. 道路にできた穴や障害物を避けることに長けている。
8. Super Mie (インドネシアの即席ラーメン) は主食だと思っている。
9. 海賊版 CD や DVD を買ったことがある。
10. 1945 年インドネシア共和国憲法を記憶させられた経験を持つ。
11. 屋台やカキリマ (移動式屋台) で売っているものを食べた事がある。
12. 「ジャカルタ」と聞くと、先ず「渋滞」が頭に浮かぶ。
13. 他人が時間に遅れるのを気にしない。
14. Terasi (小エビを発酵させて作る調味料で刺激臭がある) の匂いが好き。
15. 結婚式披露宴には、ビュッフェ料理を食べ終わるまで出席する。
16. 招待されていない披露宴に出席したことがある。
17. 台所に Baygon (殺虫剤の人気ブランド) を 1 缶は置いてある。
18. Gengsi (面子、プライド) を基に、主要な判断をする。
19. 公園に行き、Teh Botol (庶民に愛されている甘いジャスミンティー) を飲む。
20. クローブ (丁子) を食べ物からよりも煙草から消費する。
21. 財布に入りきれない程のクレジットカードを所有している。
22. 一緒に食事をした相手にトイレットペーパーやティッシュボックスを渡す。
23. 目的地の 3 メートル以内に駐車する。
24. ホルマリンは、ごく一般的な食品防腐剤だと思っている。
25. 医者より Dukun (超自然的能力を持つと信じられる伝統的な祈祷者や呪者、治療師など) を信じる。
26. T シャツに書かれた英語や日本語の下品な文句を気にしないで着用する。
27. あなたの車の後ろが渋滞していても時速 10 キロで走るのは問題ないと思う。
28. 非公式な場なのに、名前の前後に一つ以上の肩書きを使う。
29. チリソースをかければ食べ物が美味しくなると思っている。
30. 恋人とのデートの時間の多くは、他の友達とのチャットに費やされる。
31. 同じポーズの写真を 10 枚は撮る。
32. ショッピングモールに行くときは、全員 (パパ、ママ、おじいちゃん、おばあちゃん、いとこ、兄弟、息子、娘、甥、姪、ベビーシッター、その他) を連れて行く。

以上ですが、インドネシア在住の読者の方はどう思われますか。ご自分の行動に当てはまりますでしょうか。私のようにインドネシア在住が長いと、自分自身にも当てはまるが多々あり、自分が「ローカル化」していることを認識せずにいられません(笑)。

●その2 : Smile Squad (<https://www.youtube.com/watch?v=ezh3tmmewI>)

アメリカ人の YouTuber で、“Smile Squad”というチャンネルを作っている Markian という名前の青年がいます。チャンネル登録数は 71 万人強です。Markian は甘いマスクの白人の男子(私の年齢からすると息子のような)



で、彼の他に中華系アメリカ人の男の子と、イタリア系アメリカ人(風の)の男の子が出演します。彼のチャンネルには「〇〇人の友達を持つとこんな感じ」という特集があり、いろんな国籍の人を取り上げています。他国の人を笑いモノにするというのではなく、国によって様々な常識があるのだということ、ユーモアを交えて気づかせてくれる動画に仕上がっています。そのなかで、「インドネシア人の友達を持つとこんな感じ」では、インドネシア人の女の子が下記の行動をして、Markian を困惑させるという設定のショートドラマが作られています。

1. Tシャツを足拭きマット代わりに使う。
2. Jongkok (ヤンキー座り) する。
3. ポップコーンより Kerupuk (エビせんべい) をカリカリと齧るのを好む。
4. 1 台のバイクや自転車に数名で乗ろうとする。
5. トイレットペーパーではなく、トイレットシャワーを使う。
6. フライドポテトにはケチャップよりチリソースをかけるのが普通。
7. 転んだ時や打撲した際に医者に行かず、先ずマッサージ店の馴染みのマッサージ師に予約を入れる。
8. 旅行には Indomie (インドネシアの人気即席ラーメン) と炊飯器は必携。
9. 風邪のひき始めの人に、コインを使つての Kerokan (背中をコインで擦り、悪い「気」を出すとされる療法で、軽い点状出血を起こす) を勧める。
10. ピザを食べるのに、米飯を上につけて食べる(根っからの米好き)。
11. 寝る時に Guling (円柱形の抱き枕) を抱きながら寝る。
12. 左手で物を渡されると、失礼な人と感じる。
13. 携帯のチャットで、面白い話に“wkwkwkwkwk”と返信する。
14. 意味もなく Dangdut (インドネシアの歌謡曲で、踊りが伴う) に合わせて踊る。

このプログラムでは、「インド人の友達を持つと・・・」や、「ブラジル人の友達を持つと・・・」、「トルコ人の友達を持つと・・・」など、様々な国籍の女の子が出てきて、Markian との二人芝居を演じます。女の子の容姿も関係はするのですが、インドネシア人の女の子は魅力的にも関わらず、女性らしさが感じられず、その行動から中性的なイメージが拭えないのはなぜでしょうか。

地方によって違いはあるものの、とくにジャカルタで働く都会の女性は言葉や話し方、そして振る舞いにおける男女の違いが薄いような気がします。これは良し悪しではなく、文化の違いだと思いますし、「日本の常識は世界の常識ではない」ことを私自身がより認識すべきなのですが、「女の子は女の子らしく」と育てられた私の世代には違和感があるのも事実です。あくまでも持論ですが、男女の言葉や話し方、仕草、振る舞いにおける男女の差が薄いために、インドネシアのドラマや映画は、欧米のような甘いロマンチックな男女関係を描くのが苦手な気がします。皆さんは欧米や他アジア諸国の女性とインドネシア人の女性を比べて、特別な違いを感じることはありませんか。

●その3 : Sacha Stevenson

(<https://www.youtube.com/watch?v=Bp2Fnt0VbSo&list=PL1kksnrT6Y70Rr8H7HiKUdz6y86wsEI74>)

Sacha Stevenson はインドネシア人をご主人に持つカナダ人女性で、2013 年から“How to act like an Indonesian” (インドネシア人のように振る舞うには) という YouTube チャンネルを公開しています。チャンネル登録数はなんと 120 万人！ インドネシア語が流暢な彼女は自作自演、一人二役・三役でインドネシア人になりきって「インドネシア人あるある」動画を作っています。このプログラムは 25 回まで続き、その後、彼女は結婚、出産を経ながら、いくつかのテーマでプログラムを作っています。いくつかのコメディ映画や TV 番組にも出演しています。ジャカルタの生活が嫌になり、バリに引っ越した彼女は、現在、“SELEB English”というタイトルで、インドネシア人のセレブリティが話す「英語」をネイティブ・スピーカーの観点から評価する動画を作っています。



彼女がインドネシア語の「俗語」を現地人顔負けに話します。彼女はイスラム教

彼女がインドネシア語の「俗語」を現地人顔負けに話します。彼女はイスラム教

徒でもあり、インドネシア人社会にかなり溶け込んでいる様子が動画から分かります。そのため、本来、非常にセンシティブなトピックである宗教の話題や、モスクでの礼拝なども笑い話に入れており、その点が批判の対象になることもあるようです。コメントには「インドネシア人は乞食じゃないぞ」、「白人の『上から目線』の見方に過ぎない」などという批判や中傷も少なからずありますが、その反対に「インドネシア人以上にインドネシア人を理解している」とか、「こういう人、ウチの近所にいるわ〜」などというファンからの肯定的なコメントが圧倒的に多いのも事実です。さて、その“**How to act like an Indonesian**” (インドネシア人のように振る舞うには) の 25 話にはいろんなインドネシア人の特徴が出てきますが、私の印象に残っているものを羅列してみます。

1. 米飯を食べないと病気になると信じている。
2. 何処でも **Jongkok** (ヤンキー座り) をする。
3. 外国人を見ると、相手が男性でも女性でも「ミスター (最後の **Mister** の **R** は巻き舌で)」と呼ぶ。
4. トイレを終えた後に、便座をトイレットシャワーで濡らす (タイル床は濡れたまま)
5. 髪の毛のノミ取りをしてもらう。
6. 転んだ時や打撲した際には医者に行かず、先ず馴染みのマッサージ師を呼ぶ。
7. 現代医療よりも **Dukun** (超自然的能力を持つと信じられる伝統的な祈祷者や呪者、治療師など) を好む。
8. 初めて会った人に対して臆面もなく年齢を聞いたり、「痩せている、太っている」などの身体的特徴を口にしたりする。
9. **Sinetron** (ソープオペラ、昼ドラ) 視聴は、最高のエンターテインメント。
10. 新生児を布でグルグル巻きにする。
11. **Sombong** (傲慢、天狗になる) という言葉を利用して、相手を動かす。
(**Sombong** と言われるのを嫌うため)
12. パジャマで家の近所を出歩く。
13. 初めて会った人に対して山ほどの個人的な質問をして、最後に携帯の番号を聞く。
14. 氷を食べると病気になると信じている。
15. ゴミを何処でも構わず捨てる。
16. ルピア紙幣は汚いのに、海外通貨の紙幣がほんの少しでも折れていたり汚れていたりすると換算レートを下げる。
17. **Sinetron** (ソープオペラ、昼ドラ) の奥さん役は、寝起きでもしっかりメ

イクで、ドラマの展開で必ず一回は気絶する。

Sacha Stevenson の動画は、言葉にすると辛辣に聞こえますが、上記はステレオタイプではないにしても、ご近所や知り合いに必ずいる人たちを題材にしています。

上記3つの情報源には幾つかの共通項があります：

1. 米を主食とし、米飯を必ず食べる。
2. Jongkok (ヤンキー座り) をする。
3. トイレで用を足した後にトイレットシャワーを使う。
4. 病気になったら医者ではなく、民間治療を求める。
5. Sambal (チリソース) を何にでもかける。

この5つの共通点については、インドネシア人の誰も否定できないでしょう。

●米を主食とし、米飯を必ず食べる

日本人は近年、ライフスタイルの変化や、消費者の選択の拡大等を背景に米の消費量は減少、代わりにパン食が増加しています。日本人の一人当たりの年間の米消費量は約 60 kg ですが、インドネシアでは約 120~140 kg といわれ、倍以上の消費量です。生産量も中国、インドに次ぐ世界第3位を持続しています。それでも国内供給が足りず、今もベトナムやタイなどから米を輸入しています。



(左) 伝統市場の米卸売業者。(中) インドネシア料理の代表・ナシゴレン。

(右) 朝食にぴったりのブブール

多くのインドネシア人は、米を食べなければ食事をしたことにならないと考えており、「米を食べないと病気になるよ」というフレーズは年長者から良く聞か

れます。そのため、インドネシア人の多くは朝からナシゴレン（インドネシア炒飯）やブブール（お粥）、ビーフン（米麺）、ロントン（お米をバナナの葉で包んで蒸し上げた粽のようなもの）を食べます。我が家も前のご飯が沢山余った時など、翌朝は必ずナシゴレンです。

●Jongkok（ヤンキー座り）をする

ショッピングモールの前などで、若者たちが Jongkok してたむろしているのを良く見かけます。以前は、警察官が交通違反したバイク・ドライバーなどに Hukuman Jongkok（蛙のように、しゃがんだまま跳ぶ罰）を科していました。なぜ、Jongkok するのか分かりませんが、その理由の一つにトイレがあるのではないかと思います。Jongkok をヤンキー座りと訳しましたが、別名「便所座り」とも言いますよね。

インドネシアのとくに地方では Jongkok トイレがほとんどで、洋式トイレの市場は主要都市以外まだまだ少ないのが現状です。2015年のデータですが、日系衛生陶器メーカーの TOTO のインドネシア法人は、毎月 20 万台の Jongkok トイレを製造していたそうです。もちろん、メーカーは TOTO だけではありませんから、洋式トイレと比較しても、かなりの割合になるはずですが、あいにく、詳しいデータが見つかりませんでした。



(左) Jongkok する若者たち。(右) 和式トイレとは違う Jongkok トイレ。

Jongkok トイレは、和式トイレとは少し形が違います。また、座る方向も日本とは前後が逆になります。日本の和式トイレは壁側向きにしゃがみますが、インドネシアの場合はドア側向きにしゃがみます。洋式トイレはドア側向きに座るので、インドネシア式の方が正しいような気がしますが、昔、和式トイレを使っていた私には違和感があり、地方に行ったときなど Jongkok トイレに入ると、ついつい壁側を向いてしゃがんでしまいます。興味深いことに、欧米人は慣れな

い姿勢のためか、この **Jongkok** 座りができないのだそうです。

●トイレで用を足した後にトイレットシャワーを使う

トイレットシャワーは、私が 28 年前 (1992 年) にジャカルタに来たときから存在していました。当時、日本でウォッシュレットは発売されていましたが、広くは普及していなかったと記憶しています。1999 年、長女が 5 歳の時に初めて一人で JAL に乗って日本へ行きました。当然、未成年の一人旅ということで、JAL の客室乗務員の方が特別に目を掛けてくれてはいましたが、長女に「飛行機の中でも、到着した後も、トイレに行ったら **Cebok** (お尻を洗うこと) できないから、ティッシュで拭くんだよ」と教えました。それを聞いた 5 歳の長女は「日本人はお尻を洗わないの～? 汚～い!」と言ったのを覚えています。時々、日本人の出張者がホテルの客室のトイレに付いているトイレットシャワーが何か分からず、訊かれることがあります。実は日本よりずっと前からインドネシアでは「お尻を洗って」いました! (1982 年、不思議系キャラクターの戸川純が「おしりだって、洗ってほしい」と語る TOTO の CM がヒットしましたよね)。

当時からトイレットシャワーというと、「SAN-EI ブランド」が人気だったと思います。SAN-EI 株式会社は 1980 年にインドネシアに工場を設立しています。



(左) SAN-EI ブランドのトイレットシャワー。

(右) トイレットシャワーは、ホテルやオフィスビル、一般家庭で使われている。

●病気になったら医者ではなく、民間治療を求める

これはアジア人共通だと思いますが、インドネシア人も時に、西洋医療より東洋医療を信じる場所があります。民間医療のジャムウもその一つです。ジャムウとは、主に根茎、木の皮、花、種子、葉、果実といった自然素材から作られるハ

ープの伝統漢方薬です。ひと昔前は、ジャムウの瓶を籠に入れて売り歩くジャムウ売りの女性が見られたものですが、ジャカルタではもうすっかり見られなくなりました。ジャムウ売りはクバヤというジャワ伝統衣装を着て、飲む人の症状に合わせて瓶に入った液体状の漢方薬を調合したものを提供します。治療薬というよりも、予防医療としての意味合いがあり、定期的に飲まれています。近年ではジャムウ・メーカーがサシエットやタブレットのジャムウを生産・販売しています。なかでも、インドネシア国民なら誰でも知っている **Tolak Angin** (「風邪を追い出せ」という意) というジャムウをご紹介します。

Tolak Angin は生姜やミント、丁子、ハチミツ他が入ったサシエット入りジャムウで、その名の通り、風邪のひき始めに飲む漢方薬です。私は、喉の痛みを感じたときや調子が悪いとき、寝る前に飲みますが、サシエットのまま飲まず、白湯に **Tolak Angin** を溶かして飲んで寝ると、翌日スッキリするので愛用しています。1940年創立の **PT. Industri Jamu & Farmasi Sido Muncul Tbk** という老舗メーカーの目玉商品ですが、同社は今やインドネシア証券取引所に上場している大企業です。**Tolak Angin** は会社が設立される前の1930年に創業者によって販売された、まさに超ロングセラー商品です。**Tolak Angin** はインドネシアだけでなく、世界各国で販売されており、日本のアマゾンでも海外直送品として販売されています。ちなみに、**Sido Muncul** 社の2019年度の売上総利益は3兆ルピア(約220億円)でした。



(左) ジャムウ売り (こんな魅力的なジャムウ売りは現実にはいない?!)。
(右) 大量生産されるジャムウ・Tolak Angin。

●Sambal (チリソース) を何にでもかける

Sambal は辛味調味料で、サンバルソースやチリソースとも言います。地方により、また家庭によって、それぞれの「家庭の味」の Sambal がありますが、一般

的な作り方は、唐辛子、エシャロット、にんにくを石臼で挽いて、それに塩、胡椒、Terasi（小エビを発酵させて作るペースト調味料）やトマトを混ぜてペースト状にし、それをサラダ油で炒めます。仕上げに酢やライムなどで香りを付けます。メーカーが販売するサンバルソースもあり、スーパーへ行くと、その種類の多さに驚かされます。現代家庭では、手作りの Sambal よりボトル入りのソースを使うのが一般的なようです。



石臼で挽いて作る（一番左）。Terasi ペースト（左から二番目）。でき上がった Sambal（右から二番目）。スーパーマーケットに並ぶ多くのチリソース（一番右）。

●私が日頃感じるインドネシア人の特徴

上記に加えて、私自身が常日頃感じているインドネシア人の特徴をコメント入りで下記に紹介したいと思います。ただし、これらは私の周り（私の家族や、今まで会った人たち）に限定されたことかもしれませんし、ひと昔前の話もあると思います。そしてなにより、全く悪意がないことをご理解ください。

インドネシア人は：

1. ハンカチを持たず、ティッシュを大量に使う。時にトイレの洗面所に備え付けのゴワゴワした手拭き用ティッシュ（キッチンペーパーのような）を濡らしたうえでトイレの中に持ち込む。
⇒実際、あのゴワゴワのティッシュをどう使うか、またどう処理しているか知りたい😏
2. ハンカチを贈り物にすると「別れのしるし」だから縁起が悪いと言われる。
⇒縁起が悪いんじゃないくて、ただ単に使わないだけでしょう？！
3. インドネシア人女性はロングヘアが一般的で、女学生の90%はロングヘアだと思う。
⇒ショートヘアの子は「トムボーイ（おてんば娘）」と言われるのがオチ😏
4. 抗生物質は魔法の薬だと信じており、医者でさえ、鼻風邪にも簡単に抗生

物質を処方する。

⇒体にもともと備わっている「免疫」というものがあることを知っていますか、お医者様たち？ 

5. トイレでバルサム（ハッカ油やユーカリ油が入った軟膏）を使う。
⇒温感効果があるバルサムを腹痛の人がトイレ内でお腹に塗っているのだと思いますが、会社勤めしていた時に、オフィスのトイレに入るとバルサムの匂いが充満していたものです。昔は鼻をつまむくらい「嫌な臭い」でしたが、鼻が慣れてきて「良い匂い」に感じられるようになるから、慣れてすごいです。そのうえ、日常的にバルサムを使い（虫刺され、痛み、肩のこり、気分転換）こなすようになり、いろんなブランドのバルサムをコレクションまでしている私です(^_^;)
6. 手を洗った後、手を拭かず自然乾燥させる。
⇒濡れた手でドアノブを触るので、次に触る人の手が濡れてしまうでしょう 
7. 髪の毛を洗っぱなしで、オフィスに来る。ときにトイレのハンドドライヤー（乾燥機）で長い髪を乾かす。
⇒トイレに髪の毛の臭いが充満して、かなり迷惑です(。-;)
8. 計画を立てるのが苦手で、すべてが「行き当たりばったり」。
⇒ウチの主人だけではないと思いますが、旅行の予定を立てるのが苦手、翌日の予定を聞いても「明日にならないと分からない」と言う。約束してもすぐに忘れてしまい、「有言実行」や「五年計画、十年計画」などという言葉は辞書になく、まるで「ケセラセラ」や「NATO (No Action Talk Only)」を信条に生きているかのよう。「目標を立て、計画的に、順序立てて、周りの迷惑にならないように」と家でも学校でも教育された日本人の私には、お手上げになるときがたまに…ではなく！！頻繁にあります（笑）
9. 最近、流行りの ZOOM ミーティングですが、“ZOOM”を「ズーム」と発音できず、「ジューム」と発音する。
⇒日本人がインドネシア語の“e”や“r”、“ng”の発音が難しいように、インドネシア人は“z”、“tsu”、“sh”の発音が苦手です。そのため、「ジューム」になってしまうのですが、日本人からすると、赤ちゃん言葉のように聞こえて、おかしいです。
10. マッサージ師がゲップするのは普通である。
⇒インドネシアに住むメリットの一つに「マッサージを安く受けられる」ということがあります。私も好きで毎月一回は必ず近くのマッサージ店に通っていますが、マッサージは「悪い気」を出して血流を良くすると考え

られています。でも、その「悪い気」がマッサージされている側から出ないと、なぜかマッサージする人の身体を通じて出ると言われ、マッサージ師の中には施術しながらゲップする人がかなりいます。最初は失礼な人だと憤慨していましたが、そういうマッサージ師が多いので、あるとき、「どうしてそんな頻繁にゲップするの?」と聞いたところ、上述の答えでした。何人かのマッサージ師に聞きましたが、皆、同じ答えなので、それからは私の「悪い気」を代わりに出してくれているんだと思って、ゲップを我慢するようになりました(^◇^;)

インドネシア人の特徴をいろいろ書きましたが、インドネシア人読者の方にも、これら特徴に関する感想を聞いてみたいものです。

反対に、日本人の特徴も聞いてみたいですね。

インドネシア人の知り合いは皆、日本人について「規律正しい」、「礼儀正しい」、「時間厳守」、「勤勉」など良いことばかり挙げますが、日本人の言動について理解し難い点や、インドネシアの文化に合わない点も必ずあるはずです。

それらを陰口としてではなく、上記のユーチューバーのように、ユーモアを持って表現すれば、彼らの身近な日本人に「日本の常識は世界の常識ではない」ということを気づかせることができるのではないのでしょうか。

ラサ・サヤン、インドネシア

(石川礼子)

往復書簡ーインドネシア映画縦横無尽 第4信：地方舞台の映画の意義

轟（とどろき）英明 様

ガリン・ヌグロホ監督作品、『天使への手紙』（Surat untuk Bidadari）のご紹介ありがとうございます。観ごたえある作品ですね。轟さんもお指摘のように、まさにリリ・リザ監督の『フンバ・ドリームス』（Humba Dreams）は『天使への手紙』に対する返歌（アンサーソング）的な意味合いを持つものだと感じました。

金にものを言わせて横暴を繰り返し、家族や集落習俗を壊す「地方ボス」に敵愾心をあらわにする一方、失った母親の面影を追い求めながら女性にポラロイドカメラのレンズを向ける少年（天使への手紙）。一方、ジャカルタでの都会生活に染まったものの、久々の帰郷で亡くなった父親からのメッセージから親子や故郷を持つ意味、大切さに気づき、スンバの人々、風景をフィルムに収め始める青年。そしてスンバの女性への愛情に目覚める（フンバ・ドリームス）。

『天使への手紙』が近代（経済）化による地方伝統社会の崩壊への警鐘であれば、約30年後の『フンバ・ドリームス』は地方回帰、人間関係を含めた伝統継承の重要性を呼びかけた作品であるのかと。こう考えたとき、幾分しり切れとんぼで終わった印象だった『フンバ・ドリームス』ですが、やはりこの終わり方でよかったのかなと思えるようになりました。

さて、前回の轟さんからお問合せの、「撮る側と撮られる側の関係性」「中央と地方との関係性」についてですが、私は自身の取材経験から考えを述べさせていただきたいと思います。

轟さんご指摘のように、『天使への手紙』は、物語はフィクションでありながら、ドキュメンタリー色の強い面も持つ作品だと思います。また、フィクション部分でも、本来スンバで起こりうるドキュメンタリー的要素がふんだんに盛り込まれていたと思われます。多数の地元住民の方が出演していることもそうですね。

『天使への手紙』に関して言えば、私は第三者（外部の者）が意図（テーマ）を持って撮影したからこそ成り立った作品だと考えています。第三者だからこそ発見できるその地（ここではスンバ）の特徴、優劣含めた特異性、地方が抱える問題点などを俯瞰して鑑み、映画作品というメディアを通して訴えたいことを一般化する。逆に言えば、第三者が現地の実情を消化したうえで表現した作品であるからこそ、現地の人々の代弁も含めて、一般（鑑賞者）も受け入れやすくなっているのではないかと思います。もちろん、この過程においては、第三者である制作者側は撮影地域、そこに住む人々に対して知識を含めて深く理解すること、撮影・取材対象者との信頼関係を構築することは必要不可欠です。

私も、かつてドキュメンタリー番組を制作するにあたって元職場の先輩からよく言われたのが、「取材対象者にカメラの存在を忘れさせることはできない。大切なことはカメラが回っていることを意識したうえでも、本音を喋ってもらえるようになる信頼関係づくりである」ということです。取材対象者の家庭、プライベートな部分にまでカメラを持ち込むには、取材者と取材対象者との信頼関係なくしては成り立ちません。そのうえで、取材対象者の心の声、本音を口にしてもらう、仕草を見せてもらうには、さらなる信頼関係、相互理解が必要となってきます。

映画とドキュメンタリー番組では違いもありますが、おそらくガリン・ヌグロホ監督も度重なるリサーチ、取材を行い、住民との密な会話が繰り返されたと想像されます。そこには新たな発見、事前に持っていた考えと事実の相違点などもあり、シナリオから撮影対象、映像構成には大きな修正が何度も繰り返されたのではないかと。実際にカメラが回る前に費やされた時間は相当なものだったかと思われま

こうした手法、過程さえ慎重かつ確実に行われれば、「中央」（撮る側）の論理による一方的な押し付け、「地方」（撮られる側）映像の一方的な搾取は極力回避できるかと思われま

その意味で、轟さんが引用された評論文の指摘は、一概に同作品には当てはまらないようにも思えます。また評論のなかで、映画作品『鏡は嘘をつかない』

(Mirror Never Lies) について、撮影現地の美しく平和な表現のみで、現実に直面する開発による自然破壊が描かれておらず、「中央 (撮る側)」の一方的なイメージによる現地把握の姿勢であると指摘されています。私は同作品を観ていないので断言はできませんが、映像表現、作品作りの一つの手法として、あえて美しい自然や環境のみを強調して表現することで、その背景にある開発や自然破壊への危惧を逆説的に訴えることもあります。

客観的な立場で構築されるといわれるドキュメンタリー作品でさえ、特定の地域や事象、人物などを取り上げた段階ですでに選択が行われていることにもなり、作品で訴えたいテーマなり主張を反映していることに通じることになるかと思えます。日本でも NHK を始め民放テレビ各局、とくに地方局では、番組間の短時間枠や深夜枠などで美しい自然や動植物のみを BGM とともに紹介する番組がありますが、これも同様の手法によって同様のテーマ、狙いが込められているものが多いかと思われます。以上、轟さんへの的確な返答にはなっていないかと思いますが、こんなところでご容赦ください。

前回からスンバ島を舞台にした何本かの作品を通して改めて感じたことは、ガリン・ヌグロホ監督、リリ・リザ監督に限らず、インドネシア映画には地方を題材にした魅力ある作品が多く、さらに近年増えてきていることです。一方、ジャカルタが舞台でも、華やかなセレブ世界の恋愛ドラマだけでなく、厳しい都会の片隅で生き抜こうとする人々を描くような「ジャカルタ地方」の魅力的な作品も見受けられます。

そのなかで今回取り上げたいのは、2014 年、インドネシア映画祭の最優秀作品賞を獲得した『東方からの光：私はマルク』(原題：Cahaya dari Timur: Beta Maluku / 2014 年公開) です。同作品は 1999 年 1 月から約 3 年間続いた、マルク州アンボンを発端としたキリスト教徒とイスラム教徒との武力抗争(宗教抗争)を背景に、抗争当時から終結後までのアンボンが舞台となっています。

同抗争では、当時のマルク州全域(現在のマルク州、北マルク州)に飛び火し、地元報道では死者は 1,300 人余りとも約 3,000 人ともいわれています。当時、抗争発生翌週、私も取材で現地に入りましたが、アンボンの街の中心部では大通りにバリケードが張られ、双方が対峙して一触即発の緊張した状況でした。また、周辺の集落の状況を撮影するため警察のヘリコプターに同乗しましたが、森の中に点在する集落はどこまで行ってもことごとく焼かれ、教会やモスク、家屋

から炎や煙が立ち上っていました。ビデオカメラのファインダー越しに、まるでベトナム戦争映画の風景を見るようでいたたまれない思いをした覚えがあります。



『東方からの光 (Cahaya dari Timur)』のDVDジャケットより

こうした状況のもと、主人公はサッカーを教えることで子どもたちが抗争に巻き込まれないよう努力します。また抗争終結後、州対抗の全国大会出場を目指す代表チームの監督になるものの、抗争時の記憶から、キリスト教徒とイスラム教徒の選手間で不和が生じるなど、住民の心に刻まれた禍恨など宗教抗争がもたらした影響も描かれています。サブタイトルにもあるように、宗教や民族の違いを乗り越えて「ベタ・マルク（アンボン語で“私はマルク人だ”の意味）」として、平和に誇りを持って生きていこう、というのがテーマです。

サッカーチームなどスポーツの活躍を通じてナショナリズムを強調、高揚させる映画は多々あるかと思いますが、同作品の場合は、自分が住む町と隣町の住民同士で「殺すか殺されるか」といった悪夢の時期を乗り越えた、双方の心情的和解がサッカーのマルク州代表チームを介して表現されています。それに並行して、子供の養育費や教育費に苦心している奥さんが、薄給のバイクタクシー運転手の夫である主人公がサッカー指導に夢中になるのに対し不満を募らせるといった心のすれ違いも描かれ、その行方も全国大会でのチーム躍進が鍵となっていきます。紛争からの地域住民間の、また地方で慢性的である上に紛争で劣悪化した貧困に伴う家族内の「和解」がテーマとなっているだけに、いわゆる地域版

ナショナルリズム的な内容も素直に肯定的に受け取れる作品になっているかと思われます。

同作品は実話を基にしたものですが、インドネシア各地で実際に起きた様々な民族が苦痛を強いられた、あるいは抑圧を受けた事件などに際し、現地の人々がどのような雰囲気の中で、どのように感じて過ごしてきたかを詳細に再現、表現できるのは、まさに映画ならではのメディア特性であり、重要な役割のひとつだと思います。同時にドキュメント映像ではないとはいえ、貴重な歴史記録であるともいえます。

余談ですが、プロデューサーの一人はアンボン人で、今年3月に急逝した人気歌手のグレン・フレッドリー (Glenn Fredly) です。同作品でもそうですが、同氏がやはりプロデュースに加わった作品『プラハからの手紙』(Surat dari Praha / 2016年公開) といずれも素敵な挿入歌が作品内に盛り込まれています。

地方の過去を含めて現在に至るまで、何が起きているかを、現在また後世の人々に伝えるうえでも、大事件だけでなく各地で様々な波乱を抱えるインドネシアでは、映画の役割は今後も重要であり、問題意識を持った制作者が複数人いることは頼もしく、期待しているところです。

近年の作品でいえば、轟さんもよくご存知の分離独立運動に翻弄された人々を描いた、『アタンブア 39度』(Atambua 39°Celsius / 2012年公開) と『ナイトバス』(Night Bus / 2017年公開) などでしょうか。前者は2002年にインドネシアから独立した東ティモール独立にからんで分断され、西ティモール(インドネシア領)に残された父子の物語で、後者はアチェの分離独立運動に伴う独立派と国軍の武力衝突に巻き込まれる長距離バスの乗客らが描かれています。

他にも同様な作品、魅力ある作品があれば、またお教えいただければと思います。

2020年9月7日(月)
ジャカルタ・横山裕一

モフタル事件再考 ～900人余のロームシャはなぜ死んだのか～

インドネシアの新型コロナウイルス感染状況は、依然として警戒すべき状況にあります。政府は経済回復優先の姿勢を示し、中国と共同でのワクチン開発に楽観的な見解を示しています。在留許可者以外の一般観光客等のインドネシアへの年内渡航は難しい情勢であり、感染の収束がいつ頃になるかの目途はまだ立っていません。

そんなインドネシアで新型コロナウイルス感染拡大が続くなか、今回は、そうした感染症に絡めた話題を取り上げてみました。それは、日本軍が関わった第二次世界大戦中のお話です。

●ロームシャの大量死とモフタル事件

第二次世界大戦中の1944年8月、日本軍による占領下のオランダ領東インド（現・インドネシア）のバタビア（現・ジャカルタ）で、900人余のロームシャが亡くなるという事件が起きました（日本側発表では400人余）。彼らは、労働を強いられた現地人労務者であり、バタビアのクレンデル収容所に収容されていました。

労務者は日本軍による道路・空港・鉄道などの建設へ強制的に徴用された者で、ロームシャという言葉はインドネシア語でも残りました。彼らは、クレンデル収容所にいったん収容された後、東南アジア各地へ派遣されていきました。日本でも有名なのは、タイ・ビルマ間の泰緬鉄道建設ですが、オランダ領東インド領内でも多数のロームシャが徴用されました。

数字は色々あるようですが、たとえば、ジャワ島からは約28万人が徴用され、帰還できたのはわずか5万2,000人に過ぎなかったと言われています。なかでも、西ジャワの鉄道建設で9万人、スマトラ・リアウのプカンバルでの鉄道建設で7万人のロームシャが亡くなったとされます。彼らの労働は過酷を極め、食料も十分に与えられず、病気で亡くなった者も多数いたと言われます。

そうした過酷な現場へ向かう前のクレンデル収容所で、多数のロームシャが亡くなるという事件では、いったい何が起こっていたのでしょうか。彼らには、収容所で「発疹チフス・コレラ・赤痢」の混合予防ワクチン接種が行われたのですが、その後、破傷風の症状が現れて、次々に亡くなっていきました。捜査の結果、このワクチンに破傷風毒素が混入されていたことが分かりました。

同ワクチンを提供したのはエイクマン研究所とされ、同研究所のアフマド・モフタル (Achmad Mochtar) 所長の責任が問われる事態となり、彼はのちに日本軍により処刑されました。モフタル所長は日本軍の信用を失墜させるための策略を企てた、という理由でした。この事件はのちに「モフタル事件」として知られるようになりました。



アフマド・モフタル氏

(出所) [https://id.wikipedia.org/wiki/Achmad Mochtar](https://id.wikipedia.org/wiki/Achmad_Mochtar)

ところが最近、モフタル所長は濡れ衣を着せられたのであって、真相は日本軍による人体実験だったのではないか、という見解が現れてきました。

英オックスフォード大学のマラリア病専門家であるケビン・ベアード博士とインドネシア独立後にエイクマン研究所所長を務めたサンコット・マルズキ博士は、共著で出版した『モフタル事件：1942～1945年日本占領期インドネシアでの医療殺人』(J. Kevin Baird and Sangkot Marzuki (2015), *The Mochtar Affair: Murder by Medicine in Japanese Occupied Indonesia 1942-1945*) という書物で、そのような告発をしています。

そして2020年9月、この本のインドネシア語版がジャカルタで出版されることになり、歴史に興味を持つ若者らの間で、ちょっとした話題になっています。

モフタル事件自体については、資料が残っておらず、文献的な研究から真相を明らかにすることは難しく、間接情報をつなぎ合わせてみていくほかはありません。もっとも、ベアード氏とマルズキ氏は、当時のクレンデル収容所でロームシヤが亡くなっていく現場にいた唯一の証人を探し出し、彼女へのインタビューを試みています。

また、インドネシアにおける日本軍政研究で著名であり、最近『インドネシア大虐殺』(中公新書)を出版した倉沢愛子氏(慶応義塾大学名誉教授)の記事にも、モクタル事件に関する興味深い周辺情報があります。



ベアード・マルズキ『モフタル事件：1942～1945年日本占領期インドネシアでの医療殺人』(オリジナル・英語)のインドネシア語版の見本。倉沢愛子氏が寄稿している。

(出所) <https://komunitasbambu.id/product/eksperimen-keji-kedokteran-penjajahan-jepang-tragedi-lembaga-eijkman-vaksin-maut-romusha-1944-1945/>

今回は、それら限られた間接情報を踏まえながら、モフタル事件の真相が何なのか、900人余のロームシヤはなぜ死んだのか、について、ほんの少しだけ迫ってみたいと思います。

●モフタル事件のモフタル氏とは

アフマド・モフタル (Achmad Mochtar) 氏は、1892年に西スマトラ・パサマンで生まれ、幼少の頃は、学校の先生だった父親とともに各地を転々とし、バタビアの医学校 (STOVIA: プリブミと呼ばれた現地民が通える学校で現在のインドネシア大学医学部の前身) を1916年に卒業しました。

その後、北スマトラの遠隔村で医療に従事していた際に、マラリアの調査に来ていたオランダ人医師シュフナー (Schüffner) と出会い、シュフナーの尽力により、オランダのアムステルダム大学へ留学します。1927年、黄熱病の原因としてのレプトスピラ症に関する博士論文で医学博士となり、オランダから帰国後も、ブンクル、西スマトラ、スマランなどを転々としながらレプトスピラ症の研究を続け、国際的なジャーナルに何本もの論文を発表しました。1937年、後にエイクマン研究所と改名される中央医学研究所に入りました。



モフタル氏と家族。ジャカルタの自宅にて。1940年頃の写真。(出所)

<https://sains.kompas.com/read/2015/11/10/18425001/Kisah.Heroik.Achmad.Mochtar.Docter.Indonesia.yang.Mati.Dipancung.Jepang?page=all>

1942年に日本軍が進駐すると、エイクマン研究所のオランダ人は所長を含む全員が逮捕され、所長は日本軍による監禁中に脚気で死亡しました。このため、副所長だったモフタル氏が現地人として初めてのエイクマン研究所所長に任命されました。

●エイクマン研究所とパストゥール研究所（防疫研究所）

エイクマン研究所は 1888 年に病理学・細菌学の研究所として設立されました。ちなみに、エイクマンという名前は、オランダの著名な医学者で、ビタミン発見への道標を与え、1929 年にノーベル生理学・医学賞を受賞したあるクリスチャン・エイクマン博士にちなんだ名称で、彼が初代所長でした。エイクマン研究所では 1960 年代まで熱帯病予防研究が進められていました。現在は、分子生物学とバイオテクノロジーに関する研究が行われています。



現在のエイクマン研究所。建物はオランダ時代のまま。
現在、新型コロナウイルス感染症の検査機関として重要な役割を果たしている。
(出所) <https://www.facebook.com/eijkmaninstitute/>

このエイクマン研究所のほか、バンドゥンには別にパストゥール研究所がありました。パストゥール研究所では、「発疹チフス・コレラ・赤痢」の混合予防ワクチンの生産が行われていましたが、同時に破傷風予防のための新ワクチンの開発も進められていました。破傷風は兵士の多くがかかる病気であり、兵力維持の観点から開発の必要性が認識されていたためです。しかし、日本軍の進駐により、破傷風予防ワクチンの開発は中断されました。

このパストゥール研究所は、日本軍占領期に防疫研究所と改名され、引き続き、混合予防ワクチンの生産を行なっています。

●クレンデル収容所でロームシャが次々に死亡

1944年7月、バタビアのクレンデル収容所に収容されていた900人余りのロームシャに対して、防疫研究所で生産された「発疹チフス・コレラ・赤痢」の混合予防ワクチンの注射が行われました。ところがそれから1週間ほど経った8月上旬、ロームシャに次々と破傷風の症状が現れ、バタバタと亡くなっていくという事態が起きました。

日本軍は当初、患者を医学校病院へ入院させていましたが、すぐにクレンデル収容所を立入禁止とし、部外者を入れないまま、ロームシャの全員が収容所内で死亡するという事態になりました。

その後の調査で、ロームシャに注射された「発疹チフス・コレラ・赤痢」の混合予防ワクチンから破傷風菌毒素が検出されました。なぜそうなったのか。何者かが混合予防ワクチンへ意図的に破傷風菌毒素を入れたのか。何者かが誤って破傷風菌毒素を入れてしまったのか。あるいは、未完成の破傷風予防ワクチンを混合予防ワクチンに入れて人体実験しようとしたのか。

●日本軍の見解：意図的な混入

日本軍は、何者かが混合予防ワクチンへ意図的に破傷風菌毒素を混入させたという見解を採りました。そして、その責任をエイクマン研究所の研究員に帰せました。1944年10月初め、憲兵隊は、モフタル所長を含むエイクマン研究所の現地人研究員19名を逮捕し、拷問による厳しい取り調べを行いました。そのうちの何人かは、拷問に耐えられず、亡くなりました。

日本軍は、エイクマン研究所がオランダ時代からの影響を受けていて、日本に対して反感を持っており、混合予防ワクチンに破傷風菌毒素を入れて多数の死亡者を出し、日本軍に対する信用を失墜させようと企んでいた、と解釈しました。そして、その非を認めたモフタル所長を反日分子と見なし、責任を取らせて処罰するとともに、他の研究員を釈放しました。

しかし、日本軍はモフタル所長をすぐには処刑しませんでした。モフタル氏が処刑されたのは、彼が憲兵隊に逮捕されてから9ヵ月も経った、日本の敗戦が色濃い1945年7月3日でした。他のオランダ人捕虜らとともに処刑され、集団埋葬

されたため、モフタル氏の埋葬場所は長年不明のままでした。前述のベアード氏とマルズキ氏は、埋葬された犠牲者のリストを入手して詳細に調べ、2010年、モフタル氏がジャカルタのアンチョールに埋葬されたことを突き止めました。



埋葬地を発見後、新たにつくられた、部下と一緒に葬られたモフタル氏の墓。

(出所) https://id.wikipedia.org/wiki/Achmad_Mochtar

●ベアード氏とマルズキ氏の見解：人体実験

一方、ベアード氏とマルズキ氏は、日本軍が未完成の破傷風予防ワクチンを「発症チフス・コレラ・赤痢」混合予防ワクチンに入れて人体実験をしようとした、との見解を示しています。そして、モフタル氏は潔白であり、自分の部下を助けるために罪を被った、と見えています。

日本軍によると、モフタル氏は、日本軍の信用失墜のために破傷風菌毒素を混合予防ワクチンに混入させたことを認めたということですが、二人によると、モフタル氏が署名した告白状はあらかじめ日本軍が用意したものでした。モフタル氏は日本軍から告白状への署名を強制された際、部下であるエイクマン研究所の研究員の釈放という条件で日本軍と取引をしたと見られています。

日本軍が破傷風を発症したロームシャを医学校病院に最初は入院させようとしたものの、すぐに医学校病院に入って受け入れを停止させ、クレンデル収容所を立入禁止としたのは、そうした人体実験の実態に関する情報が外部に漏れることを防ぐためだったのではないかと見ているのです。実際、この件に関する文

書は全く残されていません。また、日本軍がモフタル氏をすぐに処刑しなかった点にも疑問を投げかけています。そして、モフタル氏を処刑したのは、上述のような真相が外部に漏れるのを恐れたためであると結論づけています。

通常、ワクチンの安全性を確かめるには、ネズミやサルなどの動物実験を経た後で、治験を繰り返した後に、人間に投与されるものです。他方、当時の現場では、日本軍兵士に破傷風が蔓延し、一刻も早く、熱帯で効く破傷風予防ワクチンを完成させなければならない切羽詰まった状況もあったと想像できます。そのため、動物実験をスキップして、いきなり人体実験を行うという暴挙に出てしまった可能性は十分にあり得ます。

実際、日本軍は、こうした人体実験を行っていた事実があるからです。それは、解明されつつある有名な 731 部隊の実態からも想像できます。そして、ベアード氏とマルズキ氏は、この 900 人余のロームシャの死とモフタル事件の背景に、731 部隊の関与があったのではないかと推理しています。その根拠となる事実がいくつか指摘されています。

●731 部隊は関与していたのか

戦時中、中国東北部などで細菌兵器の開発を行ったとされる関東軍防疫給水部本部、通称 731 部隊には、シンガポールに南方軍防疫給水部（通称：岡 9420 部隊）という支部が存在しました。そして、岡 9420 部隊の下には、南方の各地に支所が置かれ、バンドゥンの防疫研究所（旧・パストゥール研究所）もその強い影響下に置かれていました。すなわち、731 部隊は満州だけの話に留まっていたのです。

これだけをもって、731 部隊は関与していたと結論づけることは難しいですが、関与していなかったと否定することも難しいと思います。

一例を挙げると、1948 年 1 月に東京で起こった帝銀事件（帝国銀行椎名町支店で発生した毒物殺人事件）のときに、その遺留品に「松井蔚」という名の名刺がありました。この松井蔚という人物（ちなみに私の家族とは全く無関係です）は宮城県衛生部で働いていましたが、事件当日にアリバイがあるとされ、平沢貞通というテンペラ画家が犯人とされました。

ところが、この松井蔚という人物は戦時中 731 部隊に所属し、岡 9420 部隊を通じて、オランダ領東インドへ頻繁に出入りしていました。そして、バンドゥンの防疫研究所にも一時所属していたというのです。また、松井蔚自身、バンドゥンへ来る前に、「スマトラ（ブキティンギ？）で 200 人を殺した」と言っていたらしいです。それが物理的な騒乱によるものなのか、人体実験によるものだったのかは明確ではありません。

もし、この話が本当ならば、少なくとも、松井蔚という人物を通じて、731 部隊が何らかの形で細菌関連の研究や実験に関与し、その一部は実際に人間に使われていた可能性があり得ると考えるのが自然のような気がします。

また、当時、スラバヤに駐在していた海軍医のナカムラ・ヒロサトという人物は、収容中の囚人 17 人に対して破傷風予防ワクチンの人体実験を行って 15 人を死亡させた罪（残り 2 人は処刑）で、軍事法廷において禁固 4 年の刑を受けたことがオーストラリアの裁判記録に記載されているということです。

さらに、倉沢愛子氏によれば、人体実験かどうかは定かではないものの、収容所でのロームシャの大量死はクレンデル収容所だけでなく、バタビアの他の複数の収容所でも起こっていたということです。

●私なりの個人的な推理

はたして、収容所でのロームシャの大量死は、日本軍の信用失墜のためのモフタル氏の陰謀だったのか、それとも 731 部隊も関与した日本軍による人体実験だったのか。これだけの材料から判断するのは難しいですが、私も個人的に推理してみたいと思います。

まず、日本軍は、兵士に破傷風が蔓延していたことに鑑み、破傷風予防ワクチンの開発を早急に進めたいと考えていました。このため、すでに生産されていた「発疹チフス・コレラ・赤痢」の混合予防ワクチンに破傷風予防ワクチンを加えた新たな混合予防ワクチンの開発を進めるための実験をしていたと考えられます。しかし、それがうまくいかないまま時間が過ぎてしまったため、動物実験を省略して人体実験に至った可能性が考えられます。

すなわち、日本軍が生物兵器開発のために破傷風菌毒素を意図的に混入させたというよりも、新たな混合予防ワクチンの開発が成功していない状態で、ワクチン開発を焦って人体実験をしてしまったのではないか。その結果、注射されたロームシャが次々に死んでいったのをみて、その事実を伏せたい日本軍は、口封じのためにロームシャ全員に注射し、死亡させたのではないか。

モフタル氏は、日本軍がねつ造した告白状に署名した後、なぜ、処刑までに9ヵ月も時間がかかったのか。本当にモフタル氏の陰謀ならば、すぐに処刑するはずだと思います。この点については、未完成の新ワクチン開発を進めるため、日本軍がモフタル氏を協力させたかったのではないかと推理します。日本軍は、熱帯病に関する彼の豊富な識見を活用しようとしたのではないかと。ただ、実際にモフタル氏が協力したかどうかは分かりません。日本の敗戦が濃厚になり、新ワクチン開発の緊急性も低くなったため、用済みとなったモフタル氏を何の敬意もなく処刑し、他者と一緒に集団埋葬したのではないかと推理します。

戦時中、日本軍は占領地のあちこちで、こうした人体実験を行ってきたと考えられ、そのなかには生物兵器開発もあったかもしれません。でも、ロームシャの大量死に、731部隊関係者の関与があったからといって、それが生物兵器開発のための人体実験だったと結論づけるのは飛躍だと思います。

むしろ、この事件で最も問題なのは、ロームシャなど非日本人を日本軍が人間と見ていなかったという点です。戦争中だった、ワクチン開発を急がなければならなかった、しかたがなかった、という理由で片づけられる話ではありません。しかも、その非や欠陥を認めずに、証拠隠滅のために関係者全員を抹殺するというのは、日本軍という組織や軍人自身の保身以外の何物でもありませんし、非日本人に対する優生思想が露骨に現れています。

戦後75年、私たちはこうした優生思想を本当に払拭できているのでしょうか。そして、失敗を認めず、他者を抹殺してでも証拠隠滅を図る、ということが、現代日本社会でも頻発しているように見えるのは私だけでしょうか。

(松井和久)